

伊号三十二潜水艦搭乗記

愛知県 清田 己作

私は昭和十六年一月より昭和二十年九月までの四年九カ月の間、海軍で軍隊生活を送りました。この間、呉海兵団三カ月、横須賀海軍機雷学校八カ月、呉海軍潜水学校四カ月、伊三十二潜水艦搭乗十一カ月、横須賀海軍対潜学校高等科練習生六カ月、同校教員二カ年の経歴ですが、比較的平凡な教育部隊勤務は別として「伊三十二潜水艦」を主体として体験記を記述します。私の専門は水兵科水中測的術でした。これは水中聴音機により水中音波をレシーバーで聞き分け、潜水艦が潜水中に水上艦船の動向を察知し、艦長の判断で潜望鏡によって確認し、敵艦船を魚雷攻撃し撃沈させるというものでした。海軍潜水学校では艦の構造や複雑な機器等を勉強し、瀬戸内海で実習艦による潜水技術、操舵訓練等を実習し無事卒業しました。

命令により三カ月の作戦行動を終え、艦体の修理を兼ね呉軍港に帰投した「伊号三十二潜水艦」に勇躍搭乗しました。「伊三十二潜水艦」は長さ一〇八メートル、排水量約二二〇〇トン、最大速度二三・六ノット、水中では最大六ノット、乗組員二二〇人、水上偵察機を搭載した場合は、飛行長一、搭乗員二、整備員二、計五人が増員され、日本海軍最新鋭の潜水艦でした。同型の潜水艦は呉、長崎、神戸、横須賀等で続々建造中でした。

搭載機は上部前甲板の格納庫に入れますが、胴体はカタバルト台に載せ、両翼とフロートは胴体から外して格納します。飛行機の出動はカタバルトに載せてある胴体だけの飛行機を引き出し両翼とフロートを取り付け、潜水艦本体が全速力で風上に向かって航行し、飛行機も全速でプロペラを回し、カタバルト本体を発射すれば、飛行機は発進する仕組みになります。瀬戸内海や呉湾で何度も発進および揚収訓練を行いました。波の静かな時はよいのですが、波が少しあると、着水した飛行機も木の葉のように揺れ、潜水艦本体も

大きく揺れ、備えている起重機を起こしてワイヤーで飛行機を吊り上げるのですが容易な業ではないのです。

これで実戦に間に合うだろうかと危惧されますが、実際には飛行機を捨てて搭乗員だけを拾うという方法を取っているらしく、同型の潜水艦はハワイ島近くに潜入し飛行機を飛ばし、ハワイ上空を偵察し、搭乗員だけを救出し、米国艦隊の集結状況を大本営に報告していると聞いていました。

私は潜水艦がドックに入っている間に、担当する水中聴音機の整備をしなければならず、呉工廠の専門家の工員と幾日もかかって整備し、世話になった工員と酒を酌み交わしつつ間近に迫った出撃を待ちました。

いよいよ出撃です。今回の作戦任務はニューギニアで苦戦している日本軍への食糧、弾薬等の補給です。艦には一二〇人の三カ月間の食料その他が通路もふさぐほどに積み込まれ、特別仕立ての小型潜水艇(中には食糧、弾薬等が満載してあって大きな鯨のよう)をワイヤーで繋ぎ、呉軍港から豊後水道を経て、ラバウ

ル經由ニューギニアへの航海が始まりました。

豊後水道の出口には米国潜水艦が出没していました。大変危険な海域を通るのですが、加えて厄介な小型潜水艇を引っ張っていて、なかなか気苦勞も多いものでした。しかもノロノロ動きで航海するため、海路も平時の何倍もかかり、幾日かかってニューギニアに着いたのかは定かではありません。

目的地に着くと夜間に湾内で浮上し、信号灯を打ち上げて日本陸軍に通報し、繋いでいたワイヤーを切り離して本艦は潜航します。それを察知した米軍は高速内火艇で小型爆雷を投下し狂気のように走り回っていたのですが、本艦は大した損傷もなく現地を脱出することができました。潜水艦に満載された物資等が日本陸軍に渡っていれば辛かったです、我々には知る由もありません。

小型潜水艇物資輸送作戦を終えてラバウルに入港すると、第六潜水戦隊司令部よりオーストラリア周辺の通商破壊作戦に出撃せよとの命令が待っていました。それでも二日間の休養が下りました。半舷上陸です。

ラバウルの現地人は人懐こく温和でした。椰子の実を地中に埋めて上で火を炊くとか、また海岸で放尿して尿が流れ去らないうちにもう口をすすぐとか、驚くこととがいろいろありました。夜は急造の椰子の葉で葺いたバラック小屋が我々の仮のホテルなのですが、蚊に食われるとマラリアになるというので一人用の蚊帳を貸与されました。しかし蚊帳から手が出たり足が出て充分な眠りは出来なかつたものです。

二日間の休養だったので、毎日米軍の艦載機が爆弾を落として行きました。ここは最前線であること痛切に感じました。休養を終わって司令部の命令通りの海域に向かいました。昼は潜航、夜は浮上、三直交替で見張りに立ちましたが海は荒れていて風は冷たく身を切るようでした。空は気持ちよく晴れ渡って星がキラキラと輝いています。オーストラリア周辺海域に日本潜水艦が出没するようになったという情報を察知したのか、米英艦隊は輸送船団に護衛艦を増強したようでした。

ある日、私は三直交替の二時間勤務についていまし

た。水中聴音機のレシーバーに精神を集中して海上音を捜索すると、右三〇度に何か聞こえ、それがだんだん近付いてきます。タービン音です。私は五感を働かせ伝声管を通じて艦長に「右三〇度、商船らしきものがだんだん近付いて来ます」と報告しました。艦長はすぐ聴音室に来てレシーバーを耳にしましたが、僕には分からん聞こえないと言って司令室に去っていきました。艦長が潜望鏡を上げるよう命令しますと、右三〇度に独航商船を発見、直ちに三発の魚雷が発射されました。しかし爆発音も何の音も聴音機には入ってきませんでした。

再び潜望鏡を上げ覗いてみると魚雷は飛び魚のように海上に飛び上がり、敵護衛艦三隻に発見され攻撃に失敗しました。直ちに急速深々度潜航し、三隻の敵護衛艦からの爆雷攻撃に備え艦内の一切のモーターを停止しました。音のするものは一切ストップ、敵に察知されるのを防ぐためです。艦内に遠くの方から爆雷の爆発音が近付いて来るのが聞こえます。艦は最高潜航潜度一三〇メートルを遙かに越えて二〇〇メートルの

先で深度計の針が止まっています。水圧で艦はベシヤンコになってしまいかもしれません。艦の真上で一発爆発し、物凄い振動で艦は大きく上下左右に揺れ、真つ二つに裂かれたように思われました。これで我が命はおしまいか、腰掛けの下の一升ビンの酒をガブ飲みしました。どこからか海水が漏れる音が聞こえます。三隻の敵護衛艦が走り回って投下する爆雷の爆発音はだんだん遠くなっていきました。ネズミがチュウチュウ鳴きだったので「あ、助かった」と思ったとたん飲んだ冷酒が利いてきました。

艦長はなかなか浮上の命令を出しません。艦内は温度が上がって蒸し風呂のようです。しかしこれは、艦長の安全を考えた上での念には念を入れた処置であったのです。

二昼夜してようやく浮上、九死に一生を得ました。海上の空気は本当にうまいものでした。難を免れたのは、本艦がシドニーの川の水に押し流されて、敵艦が本艦を見失ったのも原因の一つだったと思われまます。

爆雷により破損した個所を修理するため、昼は潜

航、夜は浮上を繰り返し、潜水母艦のいるトラック島に向かいました。大本営は日本海軍潜水艦一隻がシドニー沖でアメリカ商船に攻撃を加え大破させたと発表したこと、艦内の無線で聞きました。

トラック島で修理を終えた「伊第三十二号潜水艦」は消耗した食糧等を補給して、新たな任務先のクエゼリン諸島方面の通商破壊作戦に参加しました。途中の海路は大分荒れていましたが、久しぶりにクエゼリン島の静かな湾内に停泊し、艦首の甲板でオスタップ（海軍用語で洗濯盆のこと）を取り出し汚れものの洗濯をしていると、遙か彼方に飛行機の集団がこちらに向かって来ます。米空母からの艦載機です。艦載機は直ちに急降下爆撃を始めました。本艦は直ちに急速潜航し攻撃から逃れました。水上艦船はどれもこれも黒い煙を出したり傾いたりして、ほんの瞬時ではあったが大きな被害を受けました。

クエゼリン島の防備のため駐留していた多数の童顔の少年兵たちがその後玉砕したのを知り、涙を禁じ得なかったものです。クエゼリン島からトラックに向か

う海路は物凄く荒れていました。あまり荒れた日は潜航した方が安全でした。しかし、荒れた海を航行したため潜航が故障し、潜航不能になり、危険な海域を再びトラック島に向かいました。

「伊第三十二号潜水艦」はトラック島で応急修理した後、完全修理のため呉に帰港することになりました。呉に帰港を機に私は横須賀市浦賀の海軍対潜学校高等科に入校を命ぜられ、退艦することになりました。後任には同年兵で機雷学校の同期である親友が乗艦してきました。「伊第三十二号潜水艦」はドックに入り、修理を終え、再び南方方面へ出撃しました。私が海軍対潜学校に入校し、まだ在学中に「伊第三十二号潜水艦」は米海軍により爆破撃沈されました。クエゼリン諸島の南方だと聞いています。人の運命は紙一重とはいうものの、こんな悲しいことはなく、あの親友の面影を偲び冥福を心から祈ります。

海軍対潜学校六カ月の課程を終了し、私は引き続き学校に残ることになりました。もう一人の親友も学校に残ることになりました。彼は「伊第三十二号潜水

艦」と同型の潜水艦に搭乗してドイツまで行きました。いわば無銭外国旅行をした幸運児であります。

一口にドイツに行ったといっても随分と危険と死を覚悟の決行であったのです。印度洋はまだ良いとしてアフリカの喜望峰を通過してからは、当時、制空・制海権は完全に米英に掌握されていて敵の懐に入っていたようなものでした。うまく敵の網を潜りドイツ軍と連絡して、フランスのブレスト港にやっと入港しました。当時のフランスは既にドイツに占領されていました。目的は日本の魚雷とドイツの通信兵器の交換でした。ブレスト軍港は実に完備されていて潜水艦の防空壕等もあったといえます。所期の目的を達成した乗組員たちはバリを見学し、フランスの美人の接待を受け、土産にパジャマを貰って、日本に帰ってきました。

彼と共に浦賀に下宿をとることになったのですが、彼はそのパジャマを着て寝るので下宿の小母さんが嫌がって、私の布団は敷いてくれましたが、彼の布団は敷いてくれなかったものです。当時日本中が「鬼畜米

英「撃ちてしまむ」の思想が徹底していて、外国
人との接触を不潔なものと思っていたらしいのです。

私の前の親友は私の身代わりとなって南方海域で戦
死し、もう一人の親友は死ぬ思いはしたものの外遊を
してきました。これが人生の縮図と言えるでしょう。

戦後五十余年経ちましたが、あんな戦争はもうコリ
ゴリです。平和な日本に少しでも役立ちたいと願いつ
つ終わります。

南の海の水も冷たかった

愛知県 加藤 仲二

私の略歴・戦歴

昭和十七年一月十日 大竹海兵団に入団

四月

巡洋艦「鬼怒」に乗艦、第二南

遣艦隊として西南太平洋海域の作

戦に参加

昭和十八年四月

横須賀海軍砲術学校入校

八月 空母「飛鷹」に乗艦

昭和十九年六月二十日 マリアナ海沖海戦にて沈没

駆逐艦に救助される

八月 空母「瑞鶴」に乗艦

十月二十五日 比島沖海戦にて沈没

駆逐艦に救助される

十一月より松山航空隊勤務

四国の宿毛にて終戦を迎える

時には、人の命も枯れ葉が舞うように、一瞬のうち
に大勢の人の命を失う時もある。これが戦争という無
残で悲しい嵐である。私はこの恐ろしい嵐に二度も出
合いながら、生き抜くことのできた幸運に恵まれた。

ある夜、電話のベルが鳴り、孫が電話に出て「おじ
いちゃん電話だよ」と呼び、早速電話に出た。「私は
豊川の佐々木です、私は空母「瑞鶴」に乗っていた
佐々木兵長の兄です。ある人から加藤さんが「瑞鶴」
に乗っておられたと聞きましたので、もし弟のことで
知っていることがありましたらお話を聞きたいと思い